記号性とXスケープ・システム・デザイン
―サウンドスケープを中心として―
（第II部 音高の記号性と音高信仰）

明土真也（慶応義塾大学大学院）

akedo_shinya@yahoo.co.jp

音は記号であり、様々な事物を示し（指示機能）、種々の事象を誘引する（誘引機能）。このような性質を「音の記号性」と呼ぶ。例えば、さえずりは、聴取者に対し、音源である鶯や春という時間などを指示し、美しいと感じる心理や声の方向に足を運ぶという活動などを誘引する。サウンドスケープとは、このような「音の記号性が作用する“場”」である。同様に、「香の記号性が作用する“場”」はスメルスケープであり、「Xの記号性が作用する“場”」をXスケープと呼ぶ。本論の目的は、Xスケープ・デザインの理論的基盤の構築と実用の提唱である。第１章に序論を記す。

第I部では、Xスケープ・デザインの普遍的な理論の構築と応用例を示す。これに際し、まず、森羅万象が記号（指示機能と誘引機能の少なくとも一方を備える事物）であり、森羅万象は記号という側面から読み解ける存在であること、これらを示し、デザイン・芸術・音楽などを再定義する。

第II部では、上古から江戸期・清代にかけての日本や中国のサウンドスケープに特化し、その実態の一端を明らかにする。五行思想を重視した上古から江戸期・清代までの日本や中国では、音高に意味（意味の指示機能）があり、律に正確な音高には「理想化の力」が備わる（理想化の誘引機能）と考えられた。このような性質を「音高の記号性」と呼ぶ。そして、雅楽は正確な音高により世の中を理想化することを意図した楽であること、梵鐘の律を「衆生済度の力」を備える仏尊の声と捉える思想があったこと、正確な音高を備える雅楽器や梵鐘を実現するための「音高信仰」ともいうべき真摯な活動があったこと、これらを明らかにする。

発表においては、『隋書』「音樂志」を例として、「音高の記号性」という視点を持って典籍を読み直すことで新（真）知見を得られることを示し、「音高の記号性」「音高信仰」という観点からの東洋音楽史の捉え直しを提唱する。